

Zoo and Wildlife News

No.59 2024.12



© Kazunari SUDO / Eaglet Office Inc. 2024

ズー・アンド・ワイルドライフニュース No.59

Contents

第 17 回アジア保全医学会大会参加報告	1
認定専門医協会から	3
各種委員会から	5
学生部会から	7
動物園・水族館から	12
リレー連載	15
現場レポート	20
書籍紹介	26



JAPANESE SOCIETY OF
日本野生動物医学会
ZOO AND WILDLIFE MEDICINE

日本野生動物医学会

Japanese Society of Zoo and Wildlife Medicine

目 的

1. 野生動物および動物園動物に関する動物医学研究の学術交流と発展
2. 野生動物医学の卒前・卒後教育
3. 傷病野生動物診療に関わる臨床および救護技術の交流と発展
4. 野生動物の正しい知識と理解のための一般市民への普及啓発
5. 野生動物医学および野生動物保護に関する国際交流と推進

役 員

会長	大沼 学	((国研)国立環境研究所)[統括]	評議員	宇根有美	((一社)どうぶつ疾病研究支援協会)
副会長	高見一利	(豊橋総合動植物公園)[統括補佐]		遠藤秀紀	(東京大学総合研究博物館)
副会長	田島木綿子	(国立科学博物館)[統括補佐]		大池辰也	(元 南知多ビーチランド)
顧問	坪田敏男	(北海道大学)[アドバイザー]		大野晃治	(男鹿水族館GAO)
	羽山伸一	(日本獣医生命科学大学)[アドバイザー]		岡本 実	(酪農学園大学)
	岸本真弓	((株)野生動物保護管理事務所関西分室)[アドバイザー]		落合謙爾	(岩手大学)
	須藤明子	((株)イーグレット・オフィス)[アドバイザー]		川上茂久	(群馬サファリワールド(株))
事務局長	柳川洋二郎	(北海道大学)[庶務]		木戸伸英	(横浜市立金沢動物園)
理事	和田新平	(日本獣医生命科学大学)[専門医協会]		鯉江 洋	(日本大学)
	齊藤慶輔	(猛禽類医学研究所)[広報]		後藤拓弥	((株)野生動物保護管理事務所)
	浅野 玄	(岐阜大学)[経理・基金担当(基金担当)]		寫本 樹	(日本獣医生命科学大学)
	佐々木基樹	(帯広畜産大学)[学術・教育]		下鶴倫人	(北海道大学)
	楠田哲士	(岐阜大学)[学会誌編集]		進藤順治	(北里大学)
	外平友佳理	(SALU)[ニュースレター編集]		進藤英朗	(下関市立しものせき水族館「海響館」)
	佐藤雪太	(岩手大学)[感染症対策]		鈴木正嗣	(岐阜大学)
	岩尾 一	(新潟市水族館)[臨床・普及啓発]		竹田正人	(宮崎市フェニックス自然動物園)
	長嶺 隆	(NPO法人どうぶつたちの病院沖縄)[野生動物保全・福祉]		竹鼻一也	(大阪公立大学)
	木下こづえ	(京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科) [国際交流・アジア保全医学会]		田中悠介	(仙台うみの杜水族館)
幹事	石井千尋	[庶務・経理・基金担当(経理担当)]		チェンバース ジェームズ	(東京大学)
	植田美弥	(元 横浜市立金沢動物園)[専門医協会]		中川真梨子	(群馬サファリワールド(株))
	近藤圭佑	((株)海の中道海洋生態科学館)[広報]		中津 賞	(中津動物病院)
	川瀬啓祐	(日立市かみね動物園)[学術・教育]		成島悦雄	((公社)日本動物園水族館協会)
	加藤卓也	(日本獣医生命科学大学)[学会誌編集]		根上泰子	(環境省)
	井上春奈	(わんぱーくこうちアニマルランド)[ニュースレター編集]		伴 和幸	(豊橋総合動植物公園)
	野田亜矢子	(広島市安佐動物公園)[感染症対策]		藤井 啓	(OATアグリオ(株))
	水主川剛賢	(宮崎市フェニックス自然動物園)[臨床・普及啓発]		松岡由子	(滋賀県立琵琶湖博物館)
	渡邊有希子	(猛禽類医学研究所)[野生動物保全・福祉]		松林 誠	(大阪公立大学)
	藤原摩耶子	(京都大学野生動物研究センター)[国際交流・アジア保全医学会]		松本令以	(兵庫県立コウノトリの郷公園)
監事	石塚真由美	(北海道大学)[監査]		皆川智子	((一財)沖縄美ら島財団)
	山口剛士	(鳥取大学)[監査]		宮下 実	(宇都市ときわ動物園)
評議員	赤木智香子	(ラプター・フォレスト)		向井 猛	(天王寺動物園)
	浅川満彦	(酪農学園大学)		村田浩一	(横浜市立よこはま動物園ズーラシア)
	石名坂 豪	(野生動物被害対策クリニック北海道)		森田菜摘	(横浜市立よこはま動物園ズーラシア)
	伊藤圭子	(奄美いんまや動物病院)		森光由樹	(兵庫県立大学)
	伊東隆臣	(海遊館)		柳澤牧央	((株)マリーンパレス水族館うみたまご)
	伊藤英之	(京都市動物園)		山上達彦	(長野市茶臼山動物園)
	岩田恵里	(元 岡山理科大学)		米田久美子	((一財)自然環境研究センター)
				綿貫宏史朗	(京都大学野生動物研究センター)

会 員

本会会員は正会員、学生会員、団体会員および賛助会員とする。入会を希望するものは所定の入会申込書に所要事項を記入し、会費を添えて本会事務局に申し込む。会費は以下のとおりである。

正会員：	9,000 円
学生会員：	3,000 円
団体会員：	70,000 円
賛助会員：一口	30,000 円

COVER PHOTO

オオタカ (*Accipiter gentilis*)

撮影：須藤一成 ((株)イーグレット・オフィス)

本会会員の権利は以下の通りである。

1. 本会発行の学術定期刊行物の受領
2. 本会発行の刊行物への投稿
3. 本会主催の集会への出席と研究発表
4. 総会への出席および本会の運営への参加
5. 本会役員の選挙権と被選挙権。ただし、この権利は正会員に限られる。

事務局：北海道大学大学院獣医学研究院

臨床獣医科学分野 繁殖学教室内

Tel・Fax 011-706-5234

E-mail wildmed@vetmed.hokudai.ac.jp



第 17 回アジア保全医学会大会参加報告

富安海平（帯広畜産大学）

2024 年 10 月 1 日から 3 日にかけて、モンゴル、ウランバートルで第 17 回アジア保全医学会(ASCM)大会が開催されました。昨年、帯広畜産大学の獣医学研究部門に着任した私は、アジアの海外研究者との交流や共同研究につながるような関係性をつくりたいと考え学会に初参加しました。

■ 学会について

参加者は 162 人で、口頭発表 44 演題、ポスター発表 37 演題がモンゴル生命科学大学で披露されました。前回大会のホストであった韓国の研究者の参加が一番多く、日本からは約 20 名くらいが参加していたと思います。口頭発表は 2 つの会場で並行して行われ（写真 1）、ポスター発表はお昼のランチの時間に行われました（写真 2）。口頭発表の各演題は Infectious Disease, Wildlife Management, Wildlife Rescue & Rehab, Bear, Megaherbivores, Aquatic Animal, Reptile/Amphibian, Case Report/Clinical management/Pathology のセッションごとに発表が行われました。内容としては、口頭発表は感染症が、ポスター発表は症例報告が多い印象を受けましたが、保全遺伝学や比較形態学に関する研究など内容は多岐にわたりました。

私にとって最も興味深かった研究は、国立屏東科技大学の Chih-Chen 教授によるドローンを用いた薬物投与によるシカの不孕化の研究です。台湾では捕食者がいないためシカの個体数が増加しており、植生が影響を受けているようです。しかし、ケンティン国立公園では捕殺を行えないため、個体数の調整のために繁殖機能を抑制する目的で Chih-Chen 先生は不妊ワクチンの開発を

行っていました。10 年間の大型研究プロジェクトの 2 年目なので解決すべき課題は多いと先生がプレゼンされていましたが、ドローンから放たれた注射針がシカのデコイに命中している動画は印象的でした。プレゼンが終わった後に先生とお話し、今後の研究の構想や完成像について拝聴できたことは貴重な時間でした。

私は、Bear のセッションでヒグマの臭腺の発表を行いました。座長は東京農業大学の山崎先生で、発表者は全員日本人でした。今年は哺乳類学会に参加できなかったのも、クマ研究を聞けたのはよかったのですが、他の国のクマ研究のお話が聞けなかったのは残念でした。クマセッションの一番目だった私の発表は前のシンポジウムが長引いたため、聴衆は 20 人弱でした。発表途中から人数は増えていったのですが、少し寂しい発表でした。次回は、初めての方にも、もっと研究の内容を聞いてもらえるように工夫したいです。

学会全体としては、English native な人が多くない国際学会なので、質疑応答など英語のやり取りがうまくいかない場合もゆっくり話したり、言葉を言い換えたりして言語がコミュニケーションの妨げにならないように、皆さん丁寧でやさしい対応をしてくれる印象を受けました。学会としてアジアの野生動物研究を盛り上げていこうという雰囲気は非常によいものだと感じました。

■ Field trip について

学会後に、学会企画のフィールド調査に参加しました。学会参加者の 60 人で Hustai 国立公園に行きました（写真 3, 4）。国立公園は、小さな丘が多数ある起伏のある草原で、モンゴルガゼル、



写真 1 口頭発表の様子



写真 2 ポスター発表の様子



写真3 Hustai 国立公園

ワピチ、ハゲワシなどを観察することができました。この国立公園は、Przewalski's horse という、野生馬を保護している場所なのですが、オス1頭にメスを数頭含む群れが数か所で観察されました。また、家畜のウシ、ウマが野生動物の中に混ざって、観察されたのも印象的でした。柵を作って家畜を入れなくすると野生動物の他地域との交流が失われてしまうため、畜産動物を見つけた時はレンジャーの方が公園外まで追い払いをしているようです。放牧が主体のモンゴルならではの公園管理の課題だと感じました。

■その他

モンゴルに滞在した印象として、首都のウランバートルは私には少し合いませんでした。人口14万人の帯広市から140万人の都市に出たからかもしれません。まず、車が多すぎて道路が混みすぎです（写真5）。バスは非常に時間がかかるし、排気ガスや石炭の燃焼で全体的にガスがかかっていて外を積極的に歩きたいとは思いませんでした。一方で、Hustai 国立公園は、空気がきれいで、星も綺麗でした。ウランバートルから外れて郊外に行くと自然の広がる気持ちのよい場所が続いてました。私が想像していた「モンゴル」はこちらです。モンゴル料理は基本的に優しい味付けで、ラム肉は丸焼きもスープも美味しかったです。

最後に、国際学会だけでなく海外にいる際に貴重品の管理に注意しないとよく言われますが、私はモンゴル滞りで失敗しました。学会2日目の朝、財布を持ちあげたら、クレジットカードと現金が抜かれ財布だけになっており、カード会社に問い合わせ



写真4 Hustai 国立公園ではゲル（モンゴルの移動式住居）に宿泊。ASCM president の大沼先生と共に。



写真5 ウランバートル市内の交差点。混みすぎて信号のある道路でも、警察官の方が誘導している。

たら限度額までしっかり（？）使われました。その後クレジットカードの停止と現地の警察への連絡を学会に参加しながら進めていくのは結構大変でした。財布を戻すことでカードがなくなっていることに気づかせないのはなかなか巧妙ですが、「やられた側」としては最初にとられるときと戻すときの2回もスキがあったという事実はなかなか恥ずかしい…。

次回のアジア国際学会はマレーシアだそうです。私も次参加するならば、発表のリベンジをせねば！以上、学会報告でした。



認定専門医協会から

2025 年度日本野生動物医学会認定専門医試験の実施について

日本野生動物医学会認定専門医協会 岸本真弓（株式会社野生動物保護管理事務所関西分室）

2025 年度日本野生動物医学会認定専門医試験を下記のとおり実施します。受験希望者は受験要項を参照して受験の準備を行ってください。

提出時にご希望をお知らせ下さい（連絡先メールアドレスは本稿末参照）。

<試験実施手順>

日本野生動物医学会認定専門医試験は、次のとおり 4 段階で実施します。

①書類審査

提出された書類を元に協会が厳密な書類審査を行います。その結果、受験資格を満たしていないと判断した場合は、その具体的な理由を記載した審査結果を、提出書類とともに返却します。

②一次試験

動物園動物医学，水族医学，野生動物医学，野生動物病理学・感染症学，鳥類医学，各分野からそれぞれ 8 問ずつ計 40 問の 5 択あるいは穴埋め形式の問題による試験を行います。

③二次試験

希望する専門分野に関する筆記試験を行います。

④三次試験

希望する専門分野に関する実地面接試験を行います。

※一次試験および二次試験は対面にて実施しますが，三次試験はリモートでの受験を選択することも可能です。必要書類

<必要書類・参考資料>

受験要項，試験用参考書一覧，受験申込用紙は，以下の日本野生動物医学会認定専門医協会のホームページから入手してください（2024 年 10 月 18 日に掲載された資料をご参照下さい）。

専門医協会のホームページ：

<https://sites.google.com/view/jczwm/>

<受験要項>

受験者は，以下の受験要項を熟読し，受験資格を確認した後に，遺漏無く受験申請の手続きを行ってください。

2025 年度日本野生動物医学会認定専門医試験受験要項

受験資格者：下記の日本野生動物医学会認定専門医試験受験資格規定に合致する者。

日本野生動物医学会認定専門医試験受験資格規定

a. 日本国内の獣医師資格を有し，獣医師としての十分な道徳観と倫理観をもつ者であること。

表 1 評点基準

項目	点数	備考
野生動物医学会正会員歴	継続 3 年以上 20 点	3 年は必須
野生動物医学に関連した職歴* ¹	5 年以上 30 点	
野生動物医学関連論文，その他* ²	筆頭 10 点 / 報 共著 5 点 / 報 (総計 60 点まで)	2 報は必須，内 1 報は野生動物医学会誌
日本野生動物医学会発表	筆頭 10 点 / 回 共同 5 点 / 回 (総計 40 点まで)	2 回は必須（共同も含む） 同等のワークショップ等も含む
野生動物医学に関連した社会貢献* ³	総計 20 点まで	
博士号	20 点	野生動物医学関連のテーマ
	総計 100 点以上	

*¹ 職歴は野生動物医学に関連した職種の正規・非常勤・任期付職員に従事した期間の経年歴とする。その前後に研究生・大学院生等の立場で野生動物医学に関連した分野に従事した期間があれば，その期間も 2 年を最長に運営委員会（試験委員会）の判断により加算できる。ただし，大学学部生およびそれ以前の経験についてはこれに含めない。

*^{2, 3} 内容判定は運営委員会（試験委員会）で判断する。

b. 出願時に3年(36ヶ月)以上継続して日本野生動物医学会正会員であること。

c. 職歴について以下の条件のいずれかを満たす者。

c-1 野生動物医学に関連した職種(園獣医師・野生動物救護獣医師・研究職・フィールドサーベイ等)の正規・非常勤・任期付職員に従事した期間が総計で5年(60ヶ月)以上であること。

c-2 野生動物医学に関連した上記職種に従事した期間、及びその前後に研究生・大学院生等の立場で野生動物医学に関連した分野に従事した期間^{*1}の総計が5年(60ヶ月)以上であること。

^{*1} 研究生・大学院生等の立場での従事期間は2年を最長として認定する(認定期間は当該期間の研究内容・業績を協会内で検討して決定)。大学学部生およびそれ以前の経験についてはこれに含めない。

d. 筆頭著者論文2報以上(内1報は野生動物医学会誌)を執筆していること。

e. 表1の評点基準による合計点が100点以上であること。

f. 野生動物医学に関連した学会活動、研修会参加、論文発表などを行っていること。

提出書類: 下記書類を日本野生動物医学会認定専門医事務局宛てに郵送して下さい。

- 1) 所定の受験申込フォームに必要事項を記載したもの。
- 2) 自身の関わった主要な学術論文の発表年、題名、著者名(複数の場合は申請者に下線を付す)、発表誌名を取りまとめた一覧表(書式自由)を2部、および各学術論文の表紙および要旨をコピーしたもの各2部。
- 3) 自身の関わった主要な学会発表の発表年、題名、著者名(複数の場合は申請者に下線を付す)、発表学会名を取りまとめた一覧表(書式自由)を2部、および各講演要旨をコピーしたもの各2部。
- 4) 野生動物医学に関連した社会貢献についての自己アピール(1,000字程度)2部。

例: 野生動物医学分野に関連した一般向けの活動(講演、執筆、救護ボランティアなど)、SSCやショートコースなどの参加、海外の野生動物医学に関する資格の取得等

- 5) 学位を取得した者はその学位論文の和文要旨のコピー2部。
- 6) 4cm×5cm大の顔写真(裏面に氏名記載)を2葉。

書類郵送先:

日本野生動物医学会認定専門医事務局

〒180-8602

東京都武蔵野市境南町1-7-1

日本獣医生命科学大学 水族医学研究室 和田新平

締め切り: 2025年7月31日

受験票送付: 2025年8月中旬に上記の提出書類に基づく書類審査に合格した受験者のみ送付する。

受験料: 10,000円(書類審査に合格した受験者のみ下記銀行口座に払い込んで下さい。)

払込の締め切り 2025年9月30日

払込先銀行口座 銀行: 北洋銀行

支店名: 北七条支店

口座No: 3871623

口座名: 日本野生動物医学会認定専門医事務局 事務局代表 坪田敏男

試験日程: 試験は以下の日程で実施する。

一次試験・2025年10月実施を予定

二次試験・一次試験合格者に対して一次試験と同日に実施

三次試験・11月中に対面もしくはリモートで実施を予定(受験者の要望を考慮します)

試験用参考書について: 参考書は以下のサイトに掲載する。

参考書一覧掲載サイト・<https://sites.google.com/view/jczwm/>

参考書一覧?authuser=0

<試験に関する連絡順>

試験に関して何らかの変更がある場合は、学会ホームページとメーリングリストでお知らせします。また、試験に関してのご質問は、氏名・所属を明記の上、下記アドレスまでe-mailにてお問い合わせください。

【質問の送付先】

日本野生動物医学会認定専門医事務局

yokosojczwm@gmail.com

(件名に「野生動物認定専門医について」と付記)

各種委員会から

2024 年度日本野生動物医学会主催卒前卒後教育プログラム (WEP) のお知らせ

学術・教育委員会 田島木綿子 (国立科学博物館)

1. WEP1 (博物館) コース

【実施事業体】 国立科学博物館

【実施期間】 2025 年 3 月中の 2 泊 3 日

【実施場所】 愛知県田原市伊良湖町伊良湖岬フェリー乗り場 / 座学ができる近場の民宿

伊良湖旅客ターミナル：〒441-3624 愛知県田原市伊良湖町宮下

※現地集合、現地解散

【実施概要】 クロミンクジラ全身骨格の寄贈業務一式 (全身骨格梱包、搬出) を体験する。伊良湖旅客ターミナル内にクロミンクジラ全身骨格が組まれているが、施設の改修に伴い、国立科学博物館に寄贈の相談があった。そのため、博物館業務の 1 つである、寄贈標本の収集・運搬業務一式を体験することで、博物館で行われている活動の一環を経験する。加えて、鯨類の骨格を通じて脊椎動物の骨格や構造、クロミンクジラや鯨類についての知識も高めるために、宿泊施設の会場を利用して座学も実施する。

1 日目：

午前 各自宿泊施設まで移動

午後 座学@宿泊施設 (予定)

2 日目：

終日 クロミンクジラ骨格の収集・鯨類の骨格についても知識を積む

3 日目：

午前 クロミンクジラ骨格の収集 昼頃解散

【対象】 本学会会員

【募集人数】 20 名

【参加費】 20,000 円

※講師代、手袋代など含む

※現地までの移動費は各自負担

2. WEP2 「ツキノワグマの保護管理」コース ※ 実施済み

【実施事業体】 日本獣医生命科学大学

【実施期間】 2024 年 9 月 14 日 (土) ~ 16 日 (月)

【実施場所】 長野県軽井沢町 (JR 軽井沢駅もしくは日本獣医生命科学大学に集合)

協力：NPO 法人ピッキオ

※野外実習であるため、台風により中止となる可能性あり。

【実施概要】 住居地と森林を利用するクマの行動や生息環境のデータ収集および処理作業について学ぶ。また、地域で生じている人とクマの軋轢問題を知り、その解決に向けた方法を考える。さらに、クマの生息環境におけるマダニの採集・同定を行い、マダニの感染症媒介リスクについて学ぶ。

1 日目

午後 ツキノワグマの生息環境を学ぶ

- ・実習の趣旨説明
- ・矢ヶ崎山での野外実習 (フィールドトリップとマダニ採集)

2 日目

終日 ツキノワグマの保護管理の現場と生態調査方法を学ぶ

- ・ツキノワグマの捕獲方法 (檻・麻酔・計測等)
- ・テレメトリー・ペアードックによる個体管理
- ・被害管理としてクマ対策用のゴミ箱の見学

3 日目

午前 ツキノワグマの生態を学ぶ

- ・ツキノワグマが利用する冬眠穴の観察 (昼頃解散)

【対象】 本学会会員

【募集人数】 7 ~ 12 名 (先着順, 7/12 時点で参加希望者が 7 人を下回る場合は中止)

【参加費】 30,000 円前後 (宿泊費 15,000 円 (食費込み), 講師・教材費 15,000 円)

※現地までの往復の交通費は各自負担とする。

※講師料は NPO 法人ピッキオに対するもの。

※食費は初日の夕飯, 2 日目の 3 食, 3 日目の朝食が含まれる。

3. WEP3 「野生動物医学実習・鳥類編アドバンスト」コース

※実施済み

【実施事業体】 猛禽類医学研究所 (IRBJ)

【実施期間】 2024 年 8 月 21 日 (水) ~ 2024 年 8 月 23 日 (金) の 3 日間

【実施場所】 釧路湿原野生生物保護センター (北海道釧路市北斗 2-2101)

【実施概要】座学及び実習

＜座学＞

1. 釧路湿原野生生物保護センターにおける希少鳥類保全活動の解説
2. リハビリテーション全般についての講義（各種診断・検査方法、レントゲン画像診断など）
3. バイオハザードに関する学習（鳥インフルエンザウイルス感染症への対応など）

＜実習＞

4. リハビリテーション全般の体験学習（終生飼育個体を用いての保定、診察、採血・スワブ採取、血液検査、投薬（注射・経口）、レントゲン撮影、死体を用いてのテーピング、胸腔内輸液など）
 5. 傷病死因究明のための剖検
 6. 野外調査
- ※天候等の状況に応じ、その際の移動手段はこちらで用意する。

【対象】本学会会員である獣医学部学生 4 年生以上（獣医師資格を持つ社会人含む）

【募集人数】6 名程度

【参加費】15,000 円（資料代・視察のための移動費・保険料）
※現地にて支払い

4. WEP4「水族館」コース

【実施事業体】マリンワールド海の中道

【実施期間】2025 年 2 月 22 日（土）～ 24 日（月祝）

【実施場所】マリンワールド海の中道（福岡県福岡市東区）

※宿泊場所は各自で確保

【実施概要】水族館学及び水族館実習

水族館学（講義）、館内見学、シロワニ採血（見学）、シロワニ血液検査（実習）、ペンギン採血（実習）、ペンギン血液検査（実習）、鯨類採精（見学）、精液検査、精液保存（実習）、魚類麻酔下検査（実習）、魚類解剖・病理検査（実習）、動物行動観察（実習）

※動物の状況により実習内容は変動する。

【申込方法】下記の必要事項を記載の上、E-mail にて申し込んでください。

- I) 氏名（漢字とよみがな）、性別
 - II) 日本野生動物医学会の会員番号
 - III) 所属（学校名・学部・学科・学年または所属組織名・肩書）
 - IV) 連絡先（現住所・電話番号・メールアドレス）
- ※電話番号 / メールアドレスは携帯電話でも可。

V) 将来の夢（400 字以内）

【申込先】マリンワールド海の中道 近藤圭佑
k.kondo@marine-world.co.jp

【対象】本学会会員（年齢不問）

※各自、傷害保険に加入しておくことが望ましい。

【募集人数】3 名程度

【参加費】5,000 円前後

※施設および機器使用料、テキスト代、消耗品費および人件費を含む。

※宿泊費および昼食費は含まない。

※支払いは実習初日に現地にて行ってください。

※コース実施期間中の欠席に対しての部分的返金はいりません。

5. WEP5「動物園」コース

！企画者募集中！

動物園で日夜実施されている業務、作業、治療、飼育などを体験してもらう実習を検討中。

6. WEP6「大学アドバンスト」コース

！企画者募集中！

大学において、積極的に野生動物を対象とした様々な取り組みを行っているところで実習や座学を検討中。

※ WEP の参加者は全て本学会会員のみとなります。
※コースは基本的に有料および現地への交通費も参加者の負担となります（一部参加費に含まれる）。



学生部会から

新代表挨拶

平山 薫（北海道大学獣医学部3年）

日本野生動物医学会会員の皆様、はじめまして。この度、学生部会第24期代表を務めることになりました、北海道大学獣医学部3年の平山 薫と申します。私が高校生の頃から憧れてきた学会である野生動物医学会の学生部会代表を務めることになり、この上なく光栄です。これからも学生部会が野生動物医学を学ぶ学生のよき“たまり場”であるよう、責任をもって活動していきます。どうぞよろしくお願いいたします。

私は学生部会に入り、似た考えや志をもつ人が全国にこれだけいることに初めて気づきました。一方で、同じ野生動物に興味をもつ学生でも、それぞれ背景や考えが異なる人にもたくさん出会い、常に刺激を受け、学んでいます。このように、様々なアプローチで野生動物に向き合おうとする人々が、それぞれの知識や考えを自由に共有し合い、フィールドワークや学会大会に参加するなど、より活動的になるきっかけとしての学生部会にしたいと思います。

先生方には委員会相当として認めていただき、先輩方は新たな制度を整えてくれました。皆さまの数々のご支援に深く感謝申し上げます。学会の一部としてふさわしい学生部会となるよう、執行部で挑戦して参りますので、引き続きご指導ご鞭撻を賜りますよう、よろしくお願いいたします。



写真1 北大函館キャンパスの藤棚の前にて

旧代表挨拶

清水里香（麻布大学獣医学部4年）

日本野生動物医学会会員の皆様、学生部会22期と続き23期の2期にわたり代表を務めました清水里香です。24期への代替わりに際し、挨拶申し上げます。

22期には歴代でも類稀な過渡期を経験し、大変なことも多かったですが、振り返ると充実した2年間になりました。23期には少しずつ21期から続く宿題も片付けることができました。学生部会合宿の復活に始まり、小さな恒例行事を企画することで、コロナ禍前の賑やかさを少しでも取り戻せたのかなと思っています。私は歴代の執行部の先輩方と比べると、知識の集積量も行動力も情報収集スキルも大きく不足していました。しかし、野生動物学に対する関心や知識を元々100持っている人を200、あるいは150に上げる能力はありませんが、0を1に変えるような、そんな企画や活動をすることができて、満足しています。

最後になりますが、「あんなことをやりたい！これはどう思う？」という、いつも二つ返事で一緒に盛り上げてくれた同期の執行部の皆さんに感謝しています。2年間、ありがとうございました！代表の活動に関わっていただいた皆様に、感謝申し上げます。2年間という長いようであつという間の期間の中で、素敵な経験を積み上げました。今後とも学生部会へのご愛顧を賜りますようお願いいたします。

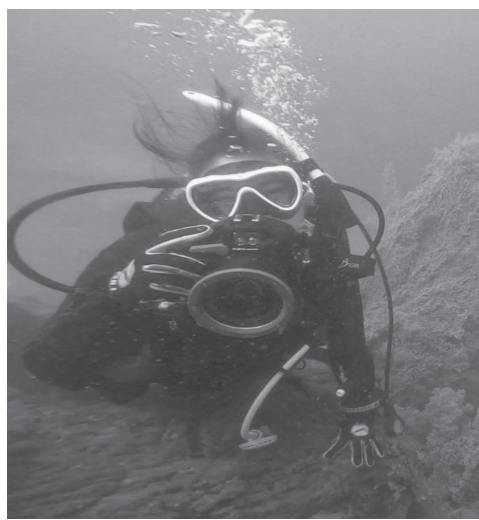


写真2 勝浦でスキューバダイビング

日本野生動物医学会学生会執行部名簿
(令和6年9月18日現在)

代表	：平山 薫 (北海道大学獣医学部獣医学科3年)
副代表	：迫野花南 (東京農工大学農学部共同獣医学科3年) ：平野早恭 (酪農学園大学獣医学類3年)
事務局長	：菅澤彩子 (日本獣医生命科学大学獣医保健看護学科2年)
会計	：柏木祐香 (麻布大学獣医学部動物応用科学科3年)

※支部の解体のため、執行部員のみ記載

〇おたる水族館飼育員実習を終えて

末松樹子 (帯広畜産大学畜産学部共同獣医学課程5年)

この夏、おたる水族館で14日間の飼育員実習に参加しました。参加を決めた理由は、卒業後の進路について悩んでいたからです。以前から、水族館獣医師に強い憧れを抱いていましたが、水族館の仕事が激務であると聞いたり、自分の将来の生活がイメージできなかったり、自分が本当にやっていけるのか不安を感じていました。本実習の一番の目的は、水族館の業務を知って、自分が情熱を注ぎたい仕事であるかを確認することでした。

おたる水族館の飼育業務は、魚類、イルカスタジアム、海獣公園の大きく3つの部門に分かれていました。今回の実習期間中にバンドウイルカの出産があり、管理のため、飼育員以外はイル



写真4 上から覗いた水槽

カスタジアムへの立ち入りが制限されていました。そのため、イルカスタジアムを除く魚類部門と海獣部門の業務を見学しました。

魚類部門では、魚への給餌や水槽内の点検、ろ過装置の作動確認、水温のチェックなど、様々な業務を体験しました。水族館では異なる魚種が同じ水槽で飼育されているため、すべての魚が餌を食べられるように工夫が必要です。たとえば、水中を自由に泳ぎ回るホッケと、岩陰に隠れて餌が底に落ちるのを待つソイが同居する水槽では、ホッケの餌を先に投下し、ホッケがそれに群がっている間に、比重の大きいソイの餌を底に沈めて給餌します。また、鱗が薄いニシンがいる水槽では、ニシンがぶつかり合って傷つくのを防ぐために餌を分散して投下します。このように、日々の業務には魚の生態を応用した工夫が凝縮されていました。

海獣部門では、餌の準備や給餌、飼育舎の掃除、ショーの進行に参加しました。さらに、獣医師の先生の診療に立ち会って、治療に関するお話を伺うことができました。先生は、休日に小動物病院に通って知識をアップデートし、水族館動物については専門書で学んだり、学会でネットワークや知識を広げたりして学び続けているそうです。大学では専門的に学ぶ機会がない水族館動物の診療は、私にとって非常に新鮮であり、学術的な研究が少ないからこその難しさを実感しました。

本実習を通して、水族館で働く方々の動物への深い愛情と観察眼に驚かされました。野生動物や魚は体調不良を隠す傾向があり、明らかな異常が現れる頃にはすでに手遅れであることが多いと言われています。そのため、おたる水族館では魚や動物たちを日々

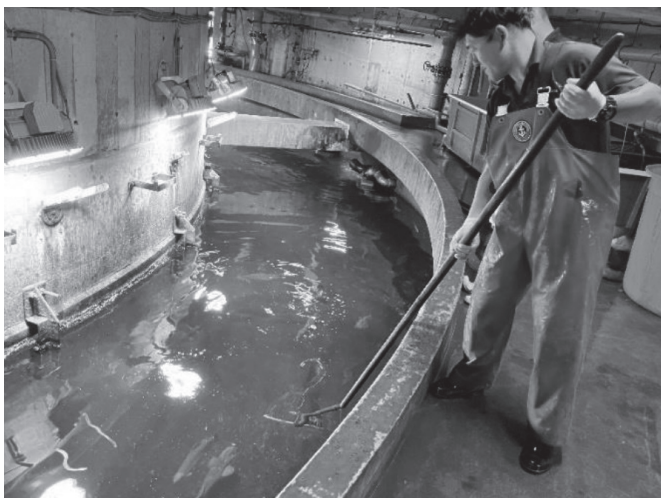


写真3 タモ網(5mほど)を使って、水槽から魚を掬い上げるところ



写真5 コツメカワウソに餌（ホッケ）をあげている様子

入念に観察し、呼吸状態や泳ぐ速度、泳いでいる位置などの些細な変化にもいち早く気づくよう努め、チーム内での情報共有を行っていました。

また、業務上の効率だけを追求するのではなく、生き物が最も快適に過ごせる環境づくりに重点を置いている点も印象的でした。たとえば、動物が飲み込みやすいサイズに餌をカットしたり、曜日ごとに餌の種類を変えたりすることで動物の体型や特性に合わせた給餌を行っていました。また、ハズバンダリートレーニングでは、動物の状態を見ながら、ストレスをかけないように細心の注意を払って実施していたことが印象的でした。

おたる水族館で働く方々の生き物に対する誠実な姿勢に感銘を受け、私も動物や魚の些細な変化にいち早く気づき、助けてあげられる存在になりたいと強く思いました。獣医師として知識や経験を積み、苦痛を最小限に抑えた治療法を考案し、治療の幅を広

げることや、病気や怪我の原因を追究することで、生き物たちがストレスなく暮らしていける環境づくりに貢献したいです。今後は、全国の水族館の実習に参加し、さまざまな現場での生き物へのアプローチの仕方を学びたいと考えています。

最後になりましたが、お忙しい中、14日間にわたり実習を受け入れてくださったおたる水族館の職員の皆様に心から感謝申し上げます。

○沖縄合宿の参加報告

田村啓邦（放送大学教養学部3年）

9月3日～5日に、沖縄本島の野生動物医学会学生会合宿に参加しました。大学名からお察しの方もいらっしゃるかもしれませんが、私は再入学者です。以前の大学在学時から狩猟を行っており、外来種問題や生態系の保全に関心がありました。現職が医師であるため、ヒト以外の動物の生態や解剖、治療に触れたかったことが学会入会の理由です。今回の合宿は、フィールドや取り扱う動物が自身の活動とは異なるため、認識する世界が広がると考え、参加を決めました。

合宿のスケジュールは以下の通りです：

●9月3日

13:00-21:00	セミナー（戸田先生・笹井先生・金城先生）
21:30-	オオコウモリ観察@琉球大学構内
23:00-	懇親会@宿

●9月4日

10:00-15:00	沖縄こどもの国見学
16:00-18:00	名護博物館
19:00頃	ウミガメ産卵跡確認@海岸
21:00-24:00	両生類爬虫類観察会@与那演習林

●9月5日

4:00-6:00	観察会続行
6:00-8:00	野鳥観察@民宿かりゆし荘付近
8:00-	適宜解散

このように、解散まで活動が詰まった合宿でした。

1日目は、沖縄の夜に観察するまでもなくオオコウモリが見られること、成獣と幼獣では皮膜の光り方が異なることを実感し、沖縄こどもの国では実際に触れることでその毛並みの柔らかさを感じました。また、準絶滅危惧種であるリュウキュウアカショウビンや日本唯一の野生化牛である口之島牛を見学し、傷病鳥獣の



写真6 実習中に観察できたハブ

様子やリハビリの実際を観察する機会も得ました。麻酔薬について、人間には比較的気軽に処方されるカロナル（アセトアミノフェン）が、犬や猫には猛毒であるという話は非常に興味深かったです。

観察会では、日本最大のリュウジンオオムカデや蛍光するオキナワアマビコヤスデ、ホルストアマビコヤスデ、ホルストガエル、ノグチゲラなど、さまざまな生き物を見ることができました。さらに、3日目の深夜の観察会ではハブに遭遇し、こちらに身体を飛ばして威嚇する姿や林の中へ去っていく様子を動画に収めることができ、とても満足感の高い合宿となりました。博物館では名護の民話や伝統的な鉾突き漁の方法、独自の組織共同売店、厨子糞での埋葬といった琉球文化について学ぶ機会も得ました。

日本固有種の多くが沖縄に存在し、分子系統学や地質学でも由来が不明な種が存在するという話にも興味深かったのですが、ここでは毒について取り上げたいと思います。トリカブトならアコニチン、フグならテトロドトキシンというのは異なり、ヘビは種によって異なるタイプの毒を持っています。ハブやマムシは出血



写真7 オキナワアマビコヤスデ

毒や筋肉毒を持ち、コブラ（ウミヘビ含む）は神経毒が主体です。また、毒牙の位置や構造も異なり、後牙、前牙（溝）、前牙（管）に分類されています。理由はまだはっきりしないそうですが、一説には消化が関係しているようです。確かに、捕獲に焦点を当てるなら神経毒を前牙で注入するのが効率的で、消化には筋肉（蛋白）分解毒を後牙で食事途中に注入の方が合理的だと思います。毒の奥深さや、蛇咬傷時の種同定の重要性、適切な血清作成の困難さを少し理解できた気がしました。

意外だったのは、地元の人々が沖縄の生物種の多様性や希少性をあまり認識していないことです。「ヘビを見たらハブと思え、そして殺してしまえ」という教育がなされてきたという金城先生のお話をきいて、種の保全や身の安全の観点からも問題があると思いました。生息地が限られた固有種が多く、その把握も不十分なため、行政主導の開発が個体数の減少に加担している状況も指摘されており、沖縄の生態系の価値を広めることは喫緊の課題だと感じました。最後に、私のセミナーメモを貼り付けておこうと思います。この駄文の足しになれば幸いです。

https://docs.google.com/document/d/1-I0nXkpQTi_53xRfRz6u8t_iGVEBd_J6Lln8It5sKnE/edit?usp=sharing

さらに、講師の方々には日中の活動だけでなく、移動中や夜の

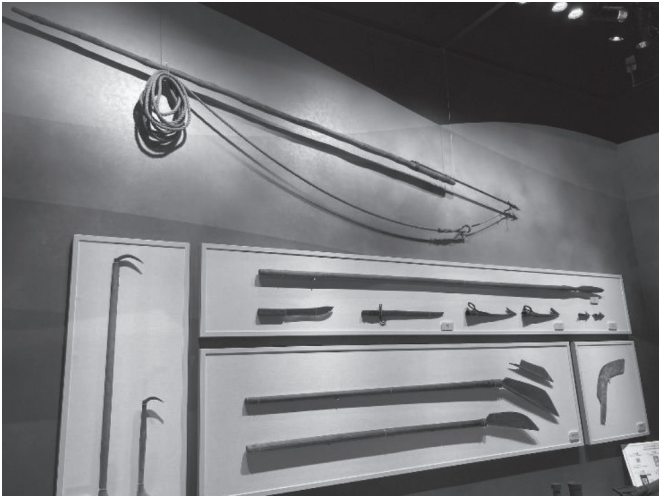


写真 8 伝統漁の鉤

懇親会でも交流を持つことができました。特に、ヘビやウミヘビの標本を見せていただいたのは、とても貴重な体験でした。毒牙が前牙であることや、クロガシラの頭がまるでチンアナゴのように細いことを実際に確認できたのは、まさにアクティブラーニングでした。

ただ、一番興味深かったのは、毒が失活しているかどうかかわからないため、牙には触れるなという笹井先生からの忠告でした。「蛇毒素成分の解析研究の現状および国内の毒蛇咬傷患者治療の実態」(諸熊一則, 友清和彦, 高橋元秀, 熊本保健科学大学研究誌 *Journal of Kumamoto Health Science University* No.19: 1-17) にもあるように、ヘビ毒成分の構造解析は道半ばであり、アルコール固定や時間経過で分解されているかどうか確認はありません。これもまた、毒の奥深さを感じる言葉でした。

参加学生に関して言えば、唯一の男で再入学の社会人という特異な立場の私に対し、他の学生はあまり変わらず、同期のように接してくれたことはとてもありがたかったです。

解散後の行動を上記に倣って記すと

9:00-11:00 民宿→宜野湾市へ

以降個人行動

12:00-14:00 野鳥 & カニ観察 @ 漫湖水鳥・湿地センター

16:00-19:00 DMM かりゆし水族館

といったものだったのですが、午後からの個人行動は1人の参加者と行動を共にしました。私は狩猟鳥獣にしか詳しくないため、フィールド選定や野鳥観察ができたのは、当該の学生や運営陣のおかげです。その体験がより深く楽しいものとなったのは、同行

者がいたからこそでした。学生として変わらず接してくれたことには感謝しかありません。最後に、本合宿を企画・実行して下さった学生会運営陣、労力を割いて講義・案内をしてくださった講師の方々、そして合宿・学会に関わるすべての方々に心より感謝申し上げます。本当にありがとうございました。



動物園・水族館から

動物園・水族館リレー連載

「ペンギンってどこから採血するの？」

僕がこの業界に入った当初に大学時代の、しかも農業共済に就職した同期の友人からそんな一報のメールが入りました。今では「クラゲ水族館」の愛称で、その名を知らない人がいない癒しの空間には、当時そしてその後もしばらく専属の獣医師がおらず管轄の農済の獣医師が往診する日々でした。しかし、ついに期待のニューフェイスが登場したのです。静かな笑顔が魅力的で人生経験豊富なイケオジ獣医に一目会った時から、ぜひこの企画に参加していただこうと目論んでいましたが、ついにその夢が叶い皆さまにご紹介する時が来ました。 [編集委員・田中]

「私のココロにささった言葉」

吉見則夫（鶴岡市立加茂水族館）

私はこれまで、獣医師としてさまざまな職場、地域で働いてきた。小動物臨床、産業動物、ちょっと野生動物、水族館と職を変えてきた。理由は常に新しい挑戦を求めていたからだ。と言えば聞こえがいいが実際は飽きっぽいだけである。結果、様々な経験ができた理由は「飽きっぽい性格」が背中を押してくれたからだ。そこで、否定的な「飽きっぽい性格」を肯定的に言い換えて私のココロにささった言葉は「挑戦を楽しむ」としたい。何度も転職することの是非はあると思うが、私は常に新しい環境での挑戦を楽しんできた。

■初めての挑戦

私の最初の職場は、一般的な動物病院だった。犬や猫を主に診察し、日々の診療をこなしていたが、数年後には自分の中で違和感をもつようになった。決まりきった診療の流れ、似たような症例、そしてルーティンワークが増えるにつれ、自分がただの作業員のように感じ始めた。そんな時期にテレビか本で「仕事が安定している時期ほど、あえて新しいことに挑むとよい」。その言葉に感銘を受けた私は今の状況とはかけ離れた分野に挑戦することを決意した。それが、私の転職獣医へと進む最初の一步だった。

■産業動物での挑戦

次に私が挑んだのは産業動物だった。ここでは、企業養鶏を巡回し衛生管理、健康管理、卵の衛生管理や各種検査など行う業務

に従事した。動物病院での仕事とは異なり動物を介して企業に利益を生み出さなければならない。そのため利益を損なう個体の殺処分など複雑で感情的に難しい問題に直面することが多かった。初めは心が痛むこともあったが、鶏だけでなく、企業に勤める人々の生活や未来も支えているのだという実感を持つようになり次第にこの仕事の魅力を見出していった。企業が利益を上げる状況を見るたびに、私はこの仕事に大きなやりがいを感じた。

それでも作業はマンネリ化し次への挑戦を模索し始めていた。

■夜間診療への挑戦

次に私が飛び込んだのは、夜間診療専門での小動物臨床だった。最初の職場と同様の小動物の診療だが夜間専門のため緊急の症例を多く診られること、昼夜逆転の生活ができることに惹かれたからだ。夜間の診療では継続治療はなく一夜限りの治療がほとんどである。生死の間での治療は緊張の連続であった。その過程で失敗や挫折を何度も経験した（臨床で失敗は死につながるので、失敗してはいけないと思うが）。しかし、「挑戦を楽しむ」という言葉が私を支え続けた。さらに昼夜逆転生活も私の生活リズムにあっていたようで仕事終わりに朝日や虹を見るのが楽しみでもあった。やがて、緊急治療も同じ症例の繰り返しと気が付き「もっと変化のある生活を、一般的でない生活をしたい」という気持ちが強くなり、私は再び新しい挑戦に乗り出すことにした。



写真1 夜間診療終了後空を見上げたら大きな虹がかかっていた。ふっと緊張が解ける一瞬。



写真2 26時間かけて内地へ出荷される牛たち
内地に着くまで船の甲板で過ごすため波をかぶりながらの出荷。

■離島での生活への挑戦

次に挑んだのは離島での生活だった。離島での生活というものを確認するため夜間診療時代の終盤には毎月、離島の小動物診療所に泊りがけでアルバイトをした。転職した島はアルバイトをしていた島とは全く異なる環境だった。内地からの交通手段が1週間に1回、船で乗り継ぎ26時間かかり島民は450人程度で全員が顔見知りであった。そのため生活するだけで体力的にも精神的にも負担を感じると想像したが「挑戦を楽しむ」という言葉を思い出し乗り越える決意をしたものの、この島の暮らしは私には快適だった。そして、島での仕事は大動物の黒毛和種4頭程度の畜産指導所での管理、牛飼いを営んでいる農家の巡回、子牛の船での出荷の手伝いなどで気軽な仕事であった。数年後、すべての農家が牛飼いを廃業したため私が島にいる必要性がなくなった。暑いが快適に生活してきたこの島に居続けるため動物病院を開業した。当然だが10頭にも満たないペット、野生動物の治療だけでは生活できないので様々なアルバイトすることになる。このような絶海の孤島でも仕事はあるもので希少種保護のための外

来種駆除作業や農家の手伝い、飲食に宿泊施設の手伝いを経験してきた。野生動物の治療（お手伝い程度）も経験した。この島では野生動物のほとんどが貴重な生き物らしいがスズメやカラスのように普段から身近にいると貴重さがわからない。内地に戻ってから希少種なのだと知ることも多々あった。

島の生活が数年経過したころ、獣医生命の最終章を考えるようになった。島から出るにはまだ動けるうちにと考え、島の生活に後ろ髪をひかれつつ内地に向かい獣医生命最後の挑戦に乗り出すことにした。

■新たな（最後の？）挑戦へ

次（獣医生命最後）に挑んだのは水族館獣医だった。水生生物を専門に診察、飼育管理する仕事である。ここでの仕事も新しい環境での挑戦だ。これからも様々な困難が待っているだろう。その困難を乗り越えるために「挑戦を楽しむ」を心の支えに困難をのりこえていきたいと思う。



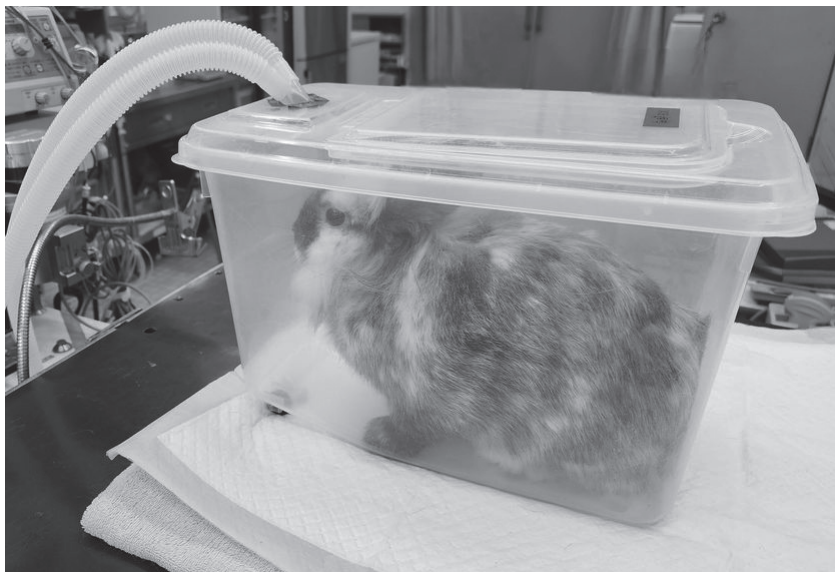
うちの自慢の道具箱！



井上 渚（鹿児島市平川動物公園）

当園からご紹介するアイテムは「米びつ」と「野菜ネット」です。米びつは某 100 円ショップで購入したものです。日頃からなにか診療に活用できるものはないかな？ と 100 円ショップを見て回るのが趣味なのですが、この米びつを見つけた時に「これは小さな動物の麻酔に使える！」とひらめき購入しました。米びつに穴をあけ、麻酔器に繋ぐことができるように加工しています。開閉できる蓋がついており動物の出し入れがしやすいこと、また容器が透明なため蓋を開けたりしなくても中の動物の状態が見やすく、呼吸状態や麻酔深度が確認でき、当園ではウサギやテンジクネズミ等の小型哺乳類、小型鳥類の麻酔導入や覚醒時、あるいは酸素化が必要な時に使用しています。

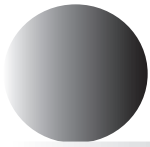
そしてもう一つは野菜等を購入した際に入っている野菜ネットです。このネットを当園ではウサギの爪切り時に使用しています。ウサギの指先は被毛が密集していてとても切りづらいのですが、この野菜ネットをウサギの指先に掛けて引っ張ると、あらびっくり！爪だけが見えるようになり、とても切りやすくなります。ぜひお試しください！



米びつを改良した麻酔ボックス



爪切り時に使用する野菜ネット



リレー連載



前号では、海外経験の豊富な黒澤拓斗さんに、学生時代のボルネオ、インド、そしてベリーズと様々な国々における実体験をご紹介します。

今号では、日本モンキーセンターの武田康祐さんに、学生時代の動物園学との出会い、そしてボルネオ、アメリカ、オーストラリア、ケニアと様々な海外経験から現職に至るまでをご紹介します。ぜひご一読下さい。

行き当たりばったりな生き方

武田康祐

(京都大学野生動物研究センター 特定研究員 /
公益財団法人日本モンキーセンター 獣医師)

私は大学卒業後の2019年4月から現在まで、愛知県犬山市にある日本モンキーセンターという霊長類専門の動物園で働いています。この記事では、私が学生時代から現在に至るまでに経験したことを紹介します。こういう“ヒト”もいるんだと認識いただければ幸いです。

■昆虫少年(+青年)時代 ～獣医学科へ～

幼少期は学研の昆虫図鑑を眺めたり、公園などで昆虫採集を楽しんだりする日々で、周囲からは「虫博士」と呼ばれることもあり。そして小学3年生の時に地元のお祭りの「虫くじ」で当たったアトラスオオカブトが産卵したことをきっかけに、カブトムシとクワガタの繁殖に夢中になりました。昆虫好きは高校になってもおさまらず、昆虫を学ぶために九州大学農学部を目指し、オープンキャンパスにも行きました。しかし昆虫の仕事で将来暮らしていける未来が想像できず不安になった時に、動物関係の仕事をするなら国家資格(獣医師)を持っていた方が有利だと考え、高校3年生の夏に急遽進路を獣医学科に変更しました。文系科目の成績が壊滅的でしたので私立大学を目指し、なんとか日本大学生物資源科学部獣医学科へ入学することができました。そして18年間育った愛媛県を離れ、神奈川県での一人暮らしがスタートしました。今となっては突然の進路変更に応じてくれた両親には感謝しきれません。

■動物園水族館巡りの開始 ～「動物園学」との出会い～

大学入学後、関東に動物園と水族館がたくさんあることを知り、関東を中心に動物園水族館巡りが始まりました。私は生き物全般

が好きですが、昆虫以外の知識はあまりなかったので、実際に観察しながら動物の種名を覚えていくような感じでした。図鑑好きの性なのか、見たことがない動物を見たり、新しいことを知ったりする時のワクワク感がたまりませんでした。趣味の延長として、動物園の教育ボランティアに通ったり、水族館で飲食のアルバイトをしたり、多方面から動物園水族館に関わろうとしていました。いくつもの園館を巡るうちに各園館の違い(よいことも悪いことも)を感じるようになっていき、「動物園」ってどうあるべきなんだろうかと考えるようになりました。その時に「動物園学入門」という本に出会い、「動物園学」という学問の存在を知りました。この本を読んだことで学問的に動物園を見るようになり、どんどんと動物園沼にハマっていきました。

■「日本野生動物医学会」との出会い

「日本野生動物医学会日本大学支部」というサークルの存在は入学してすぐ認識はしていたのですが所属せず、実際に関わり始めたのはボルネオ島に行くことを決意した大学3年生の秋頃からでした。時期としては遅い方だと自覚していますが、日本野生動物医学会は学年が上がるにつれて熱心な(ぶっとなんか?)人だけが残る印象で、濃すぎるメンバーばかりに出会えたと思っています(もちろんよい意味で)。所属するまでは個人での活動でしたが、理解ある仲間に出会えたことで、日本野生動物医学会学生部会のOB・OGさんや動物園で働くスタッフなどをお招きした講演会などの企画にも携わることができ、コミュニティがかなり広がりました。そこで出会った同期たちとは今でも仲良く連絡を取り合っており、よい仲間ができたなと思っています。

■様々な視点から野生動物を見る

動物園学を学びつつ、国内の動物園水族館を巡っていくうちに、野生動物の実際の姿や動物園の優れた展示などを見たくなり、国内外のフィールドへも足を運ぶようになりました。その中でも印象的だった場所を紹介します。当時はコロナとは無関係の学生時代だったので、行きたい時に行けてよかったです。

・ボルネオ島(2016年3月) ～「保全」を学ぶ～

動物園で飼育されている動物の野生の姿を見たいという動機でボルネオスタディツアーに参加しました。ツアー中に野生のボルネオオランウータンやテングザル、ボルネオゾウ、サイチョウ類などの有名な動物たちを野生で見ることができました。もちろん哺乳類や鳥類だけでなく昆虫も多様なので、モーレンカンブ



写真1 モーレンキャンプオオカブトを体につけて喜ぶ筆者
(ボルネオ島)



写真3 同じ空間に動物がいるように見える展示手法
(ウッドランドパーク動物園)



写真2 実在したハナカマキリ (ボルネオ島)



写真4 ユニークな求愛ダンスをするコウロコフウチョウ
(オーストラリア)

オオカブトやハナカマキリなど、図鑑や写真、標本などでしか見たことがない生き物たちを実際に観察することができ大興奮でした。その反面、多様な動物が生息できる熱帯林があるエリアが非常に限られていることも目の当たりにし、知識として知っていることと現場を見て感じる重みの違いを痛感しました。実際に現地に行くことの大切さを実感し、「保全」を意識するきっかけにもなったツアーでした。

・アメリカ (2016年11月と2017年8月) ～メッセージ性のある展示～

野生の姿ではなく、海外の優れた動物園の展示手法を見てみたいと思い行きました。世界一といわれる動物園の一つであるサン

ディエゴ動物園 (カリフォルニア州) や、ランドスケープイマージョン (=動物が生息している自然環境の中に迷い込んだような感覚を観覧者に与える展示手法) がある有名なウッドランドパーク動物園 (ワシントン州) などに訪れました。展示されている動物が魅力的に展示されているだけでなく、保全などのメッセージ性も展示デザインに組み込まれており感激しました。

・オーストラリア (2017年9月) ～独特な生態系～

日本野生動物医学会日本大学支部のOB (元支部長) でありケアンズ在住のT先輩に案内してもらいました。数日にわたってテント泊で転々としながら野生動物を探しました。フィールドワークの楽しさとともにケアンズ独特の生態系を実感することが



写真5 群れで移動するアフリカゾウ（ケニア）

できました。

・ケニア（2018年3月）～大型動物の「群れ」をみる～

野生動物といえばアフリカという固定観念があり、野生動物保全団体が主催の学生向けのスタディツアーの企画があったので、6年生になる直前の時期に思い切って行きました。アフリカゾウやマサイキリン、インパラ、カバなどの大型哺乳類が群れになっている姿を実際に見ることができ、サバンナの広大さを感じました。野生動物だけでなく、ケニアのハクナマタタな文化も印象深かったです。

■進路の悩み ～ニートの危機～

以上のように、動物園について知るためにいろいろと活動してきましたが、進路を考えた時、動物園で働きたいのかというところでもないような気がして、将来何がしたいのか自分でも分かりませんでした。型にはまりたくないという無駄なプライドを持ちつつ、適当に獣医師として働くことや動物写真家になること、大学院に進学することなども考えました。

2018年12月（大学5年生）に動物園関係の講演会後の懇親会で日本モンキーセンターのW氏と出会い、日本モンキーセンターを案内していただけることになりました。日本モンキーセンターは「動物園学入門」でも紹介されている動物園で、1956年開園当初から研究部門を持っているという（カッコよい意味で）異質な動物園です。死亡後剖検した霊長類の臓器や骨格は基本的にすべて保存しており、今では何千個体分もの霊長類の標本が保管されています。W氏の案内の際に実際にこれらの標本庫なども



写真6 マサイキリンとキバシウシツツキの共生関係（ケニア）

を見せていただきとても感激しました。隣接の京都大学霊長類研究所（現在の京都大学ヒト行動進化研究センター）も見学し、犬山市が霊長類学の重要拠点になっていることを実感しました。この感動が忘れられず大学6年生の夏休み（普通は進路が決まっている時期）に日本モンキーセンターの実習に行ってみることにしました。行ってみるとスタッフが少数精鋭で生き生きとしており、想像以上に充実した実習でした。同時に犬山市の灼熱の夏に自分の身体が耐えられることもわかったため、日本モンキーセンターに就職したい（獣医師としてではなくても）という思いが強くなりました。そして、国家試験の合格発表後というギリギリのタイミングで運よく内定をいただくことができ、卒後ニートになることを免れました。人生何が起るかわかりませんね。



写真7 幸島のニホンザル



写真8 レクチャーの様子

■公益財団法人日本モンキーセンターでの仕事

そんなこんなで、霊長類が特別好きというわけではなかった私が日本モンキーセンターに入社することになり、W氏は職場の上司になりました。ちなみに日本モンキーセンターでは現在約50種約700頭の霊長類を飼育しており、世界トップクラスのコレクション数を誇っています。種ごと個体ごとに個性があったり群れごとに社会性が異なったりして、今では霊長類に魅了されています。

・飼育員時代（2019年度～）

入社時は飼育員でした。展示エリアのマダガスカル、アジア、南米の霊長類の飼育担当を経て、病院に併設された非公開エリアの担当になりました。入院個体や非展示個体の飼育管理をし、様々な霊長類の飼育経験ができました。

飼育業務以外に生息地研修があり、野生のニホンザルを見るために宮崎県の幸島（霊長類学発祥の地）や新潟県の笹ヶ峰、長野県の地獄谷温泉などへ訪れることができました。飼育下ニホンザルと野生ニホンザルの共通点や相違点、さらには野生ニホンザルの地域差（外見や文化など）も実体験として学ぶことができました。

・獣医師時代（2021年度～）

2021年度の途中から徐々に動物園獣医師の仕事も任せてもらえるようになりました。健康管理や病気・ケガの治療、死亡後の剖検だけでなく、入院個体の飼育管理や遠足シーズンにはレクチャー

ヤーなどをすることもあります。

・京都大学特定研究員（2024年度～）

2024年度からは京都大学野生動物研究センターの特定研究員（兼日本モンキーセンター獣医師）に本所属が変わりました。文部科学省「ナショナルバイオリソースプロジェクト（NBRP）」の一環として実施されているGAIN（大型類人猿情報ネットワーク）事業の担当をしており、国内飼育下の大型類人猿の基礎情報の収集・整理、非侵襲的手法での研究利用推進などのための研究者と飼育施設とのネットワーク構築をおこなっています。希少な類人猿（チンパンジー・ボノボ・ゴリラ・オランウータン・テナガザル）の死亡・解剖後に本来処分されてしまうものを試料（遺伝試料、骨格、培養細胞など）として少しでも多く有効利用できる形に残せるように、飼育施設と研究者の両者に働きかけ、繋げる活動をしています。その一環として動物園に訪問したり学会に参加したりすることもあります。どなたでも見ることができるGAIN情報サイト（<https://shigen.nig.ac.jp/gain/>）がありますので、気になった方はぜひ覗いてみてください。現在国内で飼育されている類人猿約500個体（過去の個体を含めると2000個体以上）の個体情報（飼育施設、経歴、親子関係など）が記載されています。

■最後に

明確な目標を持たずにやりたいことをやっていただけですが、様々な縁に恵まれて、やりがいのある楽しい職場で働いています。結果論ではありますが、学生時代の様々な活動が今の仕事に役立っています。今でも動物園水族館巡りは続けており、他にも



写真9 犬山市で撮影したニホンカモシカ

自然豊かな犬山市で野生動物を探したり海外遠征もしたりして相変わらずマイペースに生きています。私は学生時代に実習やインターンにほとんど行かずに過ごしてしまいましたが、絶対にいろいろと行った方がよいと思います。

もし学生時代の私と同じような将来の悩みを持っている方がい

れば（そうではない方も）、犬山市にある日本モンキーセンターにぜひ遊びに来てください。見学でも実習（飼育，獣医，学芸員）でも研究利用でも大歓迎です。もっと迷走することになるかもしれませんが、ご来“猿”お待ちしております。

現場レポート

突撃！お仕事現場拝見！

ニュースレター編集長です。

今回は突撃先が決まらないままメ切が近付いてしまったので、責任をとって恥ずかしながら自らのことを書きました。が、結果的には自身の仕事を客観視する貴重な機会となりました。みなさんもぜひ自薦他薦お願いします！

所属 SALU 外平動物総合事務所

お名前 外平友佳理

1. お仕事の内容について教えてください

1 日のお仕事の流れ／勤務時間／必要とされるスキルやあるとよいスキル／この現場で特にみてほしいポイントやぜひご紹介したいものなど

仕事は主に下記 6 つで、勤務時間は移動時間も加味してそれぞれで異なります。環境への配慮と事故防止のためにマイカーは持たず、小倉駅を起点に新幹線などの列車通勤がほとんどで②④は自転車を使うことが多いです。

- ① 動物園動物などの動物施設の飼育動物の診察
- ② 一般の方のペットの往診
- ③ 動物専門学校で飼育される動物の診療と学生へのレクチャー
- ④ 北九州市夜間救急動物病院
- ⑤ 山口県の個人動物病院
- ⑥ SALU 大入 だいにゅう 動物診療所（2024 年 8 月開設）

以下順を追って紹介します

- ① 定期的に診ているのは 6 施設です。獣医師がいないところが多いため、実際に行くことよりも LINE でのリモート診療が中心です。最も遠くでは和歌山城公園動物園で、年に 3 回ほどの往診時は来園者向けの「獣医師体験」（倍率 10 倍以上の人気！）なども行っており、合わせて教育普及活動もしています。

大切にしていることは各施設のスタッフとのコミュニケーションです。若い人がほとんどですが、やる気と意識は高く彼ら

に寄り添いながらこれまでの動物園の経験（皮肉にも失敗が一番の経験値となる）を活用できるようお手伝いしています。

- ② 往診依頼は一般的な動物病院で診てもらえないヤギやミニブ



写真2 ハズバンダリートレーニングでのライオンの採血



写真3 ヤマアラシの膀胱結石のオペ
針の被毛は剃毛が大変、皮膚が剥け易く縫合も大変

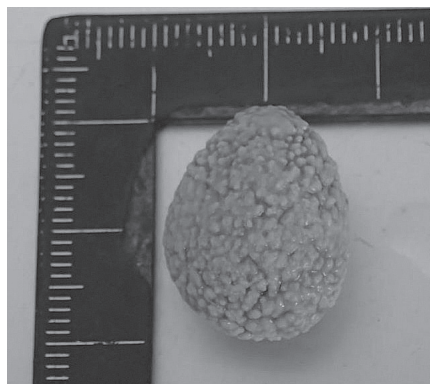


写真4 取り出した膀胱結石



写真5 馬の往診もたまにあります

タなどの動物がほとんどです。ほかには視覚障害者や高齢者など病院に連れていくことが困難な方からの依頼もあります。が、在宅していることがほとんどないためすぐに対応できないのが難点で、まずは電話で対応し診てもらえる先生などに回すこともあります。

ペットの診察では、大切な家族を診る重みに最初は不安もありました。また直接お金を支払ってくれる顧客でもあり気を遣いましたが、よい方ばかりに恵まれてかえって深いお付き合いも楽しくて魅力です。また飼育環境を見ることができるので問題解決にもつながりやすく、やりがいはとても大きいです。



写真6 100kgを超えるミニブタの爪（蹄）切りは麻酔下で

- ③ 現在は2つの動物専門学校に行っています。授業の一環として診る場合と放課後クラブの時間で診る場合があります。動物園の場合と同じく「それぞれに合った飼い方」こそが、疾病予防も治療でも重要です。

このため学生には単に治療するだけでなく飼育の仕方、原因

や治療の理由などを細かく説明しています。20人ほどに囲まれて2時間以上も話しながら行くと最初はぐったりと疲れましたが、通うほどに病気も減りました。また、息子と同世代なので学生にも愛着は沸く一方で、今では楽しい仕事となっています。



写真7 福岡 ECO 動物海洋専門学校にて

- ④ 往診専門であっても獣医師会には入っているため、経営する夜間救急動物病院の当番に入っています。私はイヌネコの診療経験が浅いため、むしろ貴重な経験を積めるので通常は月2回程度の中、週3回入ることもありました。暇（平和）な日もありますが、いざ救急症例が来ると迅速な診断と処置が必要とされるため非常に勉強になります。さらに私がいる日は様々な動物も受け入れるので、これまで3mのヘビや70kg超えのヤギ、ミニブタ、傷ついた野鳥が来るなどこちらも経験値を積めてありがたいです。



写真8 家の中で脱走しルアー箱で体中傷ついたヘビを麻酔下で縫合



写真9 テグーなど大型の爬虫類も多く来る

⑤ 山口県の動物病院で週1回程度勤務しています。常時獣医師5名ほどに看護師は10人以上もいる大きな病院で、症例数が多いのでこちらも非常に勉強になります。通い始めて1年半になりますが、最近は特殊な動物（小型哺乳類をはじめマイクロブタ・爬虫類・猛禽類ほか大型鳥類など）の飼い主さんが私の勤務日をチェックしてその日に連れてきてくれます（他県から来られることもあります）。また、一般的な去勢避妊手術なども毎日ありオペもでき、腕を慣らせるので助かります。

ちなみに、エキゾチック動物用に使っている部屋は個室で、例えば私がキバタン（オウムの1種）のレントゲンを撮っている間、大型インコの飼い主さん同士がそこで交流会をしていることもあります。ペット界のマイノリティーとしてみなさん悩みなども多いですが、やはり大切なのが「最適な飼育環境」であるかどうかです。特に爬虫類では温度湿度はもちろん飼育環境に左右されやすいため問診でどれだけ聞き出せるかは重要

です。とはいえ、ペットは人が幸せになるためにいるとも思っているので飼い主が無理することなく「楽しく一緒に暮らすこと」を念頭に診療にあたっています。

⑥ これまで身軽に飛び回ってきましたが、それだけではフォローしきれないことをつくづく実感していました。家畜種の動物は命をいただくのではなく「家族として一緒に暮らす」時代がもう来ていると思っています（私もまだ食べてはいますが）。彼らがどれだけ賢く人と仲良くなれる生き物か、ペットとして飼っている方はみな知っています。けれど手術できる場所がほとんどなく、これまではご厚意に甘えて知人（北九州市獣医師会会長）の病院でヤギやラマの開腹手術など行ってきましたが、100 kgを超えるボニーなどはさすがに無理です。このため家畜種のペットをきちんと診てオペまでできる診療所があればと思っていました。

そんな中ご縁があって福岡県糸島市で素敵な場所に出会い、さらに閉院してしまった動物病院の機材を引き取る形でトントン拍子に話が進みました。貯金はほぼゼロであったので資金確保のためにクラウドファンディングにも挑戦し、見ず知らずの多くの方に支援をいただきました。この体験自体も私にとって貴重な経験となり、たくさんの方のまさに「夢が詰まった場所」ができることになりました。

やっとできた診療所ですが上記のようにほかの業務が多いことから、毎日開けることはできません。ですが、いざという時の場所が確保できて安心です。開所して3か月目ですが、ご近所のイヌやネコはもちろん、ミニブタやヤギをはじめとした一般動物病院では断られてしまう様々な動物たちを診ています。



写真10 CTもあるためチンチラの歯牙疾患の診断に使うことも



写真11 手術台は人用で300 kgまで耐えられます



写真 12 診察エリア



写真 13 70kg のグレートデーンもレントゲンを撮りに来ました

2. 現在までの経緯について教えてください

このお仕事を目指したきっかけ／それに対して努力したこと・大変だったこと／学生時代にしていたこと／履歴など

子どものころから野生動物の生態に興味があり生物学者にあこがれました。高校2年生のころ家の庭で上腕骨を骨折したツグミを保護しましたが、近隣の動物病院では「イヌとネコしか診ない」と断られ、なすすべなく翌日亡くなりました。そのことをきっかけに誰のものでもない命を助けたい！と獣医師を目指しました。宮崎大学では都井岬



写真 14 宮崎県都井岬の御崎馬

の半野生馬、御崎馬の行動研究を専攻しました。大阪教育大学小学校課程も受験したほど子どもも好きだったことから、就職先は「野生動物」と「子ども」どちらもいる動物園が一番だと考え、長崎バイオパークに入りました。しかし技術も知識もなく、たくさんの動物を救えず亡くしました。飼育動物は友だちでもあることから失った悲しみと助けられなかった悔しさに強く襲われ、それでも信頼して育ててくれているスタッフにも申し訳なさでいっぱいでした。動物園で働く以上、獣医師は「腕」が無ければ意味がない。この時につくづく思い知らされました。



写真 15 長崎バイオパーク時代麻酔下でカバの牙切りを行い日本動物園水族館雑誌に投稿したことは思い出深い

そして腕を磨くために麻布大学付属家畜病院（建て替える前のころの）の研修医を経て大阪の動物病院で2年勤務しました。空いた時間はとにかく勉強して技術と知識が身についていくことがとても楽しかったです。本当はまだまだ修行したかったのですが、故郷の動物園がリニューアルに合わせて獣医師を募集すると聞き、いつか必ず動物園に戻りたかったので就職しました。

閉園を決めた民間の動物園でしたが、市民運動で北九州市の人



写真 16 到津の森公園開園日は7万人近い人が訪れた

口 1/4 もの署名を集めたことから、市立の動物園として存続することになったのです。その経緯もドラマチックですが、同じ場所ですれすれ作り替えるということも前例がないものでした。疾病の原因の多くは飼育環境と書きましたが、環境が変わり多くの動物にトラブルが続出しました。まだ獣医師は私だけで、イノシシの直腸脱のオペ中にゾウが倒れたと呼び出されたり、本当に忙しい時期でした。

学生の頃は探検部に所属し山に登り海にも洞窟にも潜っていました。またオフロードバイクで林道を走り、モトクロス大会に出場したこともあります。様々なバイトを掛け持ちし、お金をためては旅行に行き… ほとんど遊んでましたね。

研究室では御崎馬だけでなく与那国島の与那国馬の研究も（沖縄に行きたいという下心で）行いました。動物行動学は認知行動学や進化行動学などと呼ばれ、比較的新しい学問ですが、動物の行動の理由やその心を探る研究はとてもわくわくします。今も私の動物観の礎であり、ライフワークです。

そして若いうちは学会をはじめとにかく色々なところに行き、さまざまな方であって飲んで仲良くなることが一番楽しかったような気がします… 今もまさしくそうですね。

色々なことがあっても8割以上は居心地よく楽しい動物園勤務時代でしたが、いずれは「一生できる仕事」をやりたいと思っていました。また気候変動で地球環境が劇的に変化し危機感が増す中で「自然と生き物と人が共存できる場所」を作りたいと考えるようになりました。

3. 今特に取り組んでいることや抱えているプロジェクトなどあれば教えてください

研究論文や資料、グラフなどあれば

研究からはすっかり離れてしまっていますが、最近中医学の勉強も少しかじっており、さまざまな動物種に漢方薬を使ってその知見を集めています。

月に1回、3年以上も北九州市の街中で「1日ふれあい動物園 & 獣医師体験」を実施しており、出口調査も行っています。動物園に行ったことがないけれど動物とのふれあいをしたお子さんが少しでもいれば大成功だと思っています。また、獣医師体験ではいつのまにか「本気で獣医師を目指す弟子」が7人もできました。こうしたことも何らかの形でまとめたと思っており継続していくつもりです。



写真 17 ツキノワグマへの漢方を使用例
(日本ペット中医学研究会発表)



写真 18 買い物客が多く行きかう中での1日動物園の様子



写真 19 獣医師体験ではライオンの血液塗抹など顕微鏡で見る

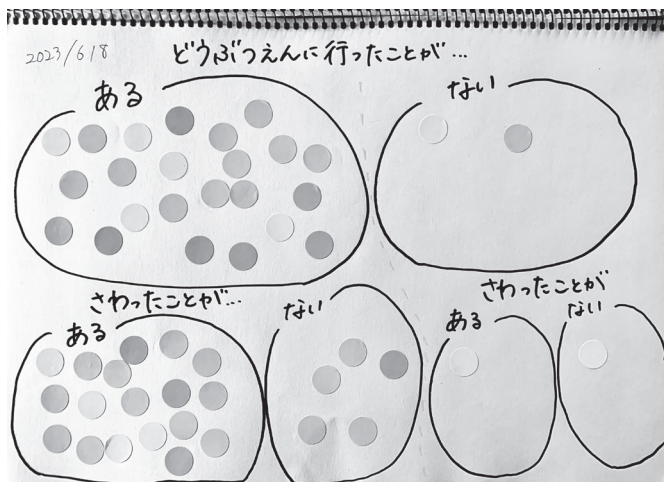


写真 20 「1日ふれあい動物園&獣医師体験」の出口調査



写真 21 小学生の弟子と彼らを書いてくれた診療所の看板

4. 仕事における一番のやりがいもしくは楽しいことについて教えてください

飼い主さんから「安心した」と言ってもらえることです。そしてフリーランスはまさにフリー！自分で仕事を作り、また選べるのが一番楽しいです。

5. 仕事における一番つらいところもしくは苦勞することについて教えてください

どんなに頼りにされても助けられないときが何よりもつらいです。それに尽きます。様々な動物種とシチュエーションに合わせて診療は変わるので学ぶことはどこまでも尽きず、時間のやりくりなども大変ですが 50 歳も過ぎると無理はしないのであまり苦勞とは思っていません。

6. 今後の目標について教えてください

大型動物の診療所は作ったので、あとは野生動物のレスキューセンターと、農業林業も兼ねた里山地区を展開したいです。

来て体験体感することで、自然と生き物との共存をはかり幸せな地球の未来へ貢献でき意識を持ってもらえるような、そんな場所を作りたいです。

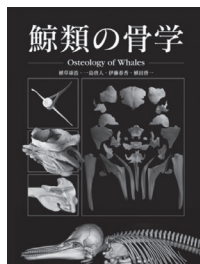
7. 学会員みなさんへ（特に学生会員に）ひとことお願いします

いくつになっても新たな挑戦はできます！思い切ってチャレンジしてみると新しい世界が広がって楽しいですよ！

大入動物診療所は海辺まで徒歩7分、自然に囲まれたよいところです。ぜひお気軽に遊びに（お手伝い歓迎！）来てください！！

sotohira@nifty.com まで

書籍紹介



『鯨類の骨学』

植草康浩・一島啓人・伊藤春香・植田啓一 著

2019年2月

緑書房 発行

152 頁

定価 6,600 円（本体 6,000 円＋税）

浅川満彦（酪農学園大学獣医学類）

1980 年代の中頃、ハクジラ類の座礁原因を中・内耳に寄生する *Nasitorea* 属吸虫（一部、*Stenurus* 属線虫）を原因とする説が公表され（森光 1991）、当時、寄生虫学界で話題となったし、今日でも、有力な説の一つとして引用されている（たとえば、Kim et al. 2023）。その説を提唱したのは耳鼻咽喉科医師（当時、宮崎医科大学）で、奇しくも本書筆頭著者と同じ専門分野であった。いや、偶然ではなく、陸で完成した呼吸や発声、それを聴く仕組みが水中で凄まじい変革を強いられ、あのあたり（咽頭・喉頭・耳管の交差・密集する場所）が適応・変化した様子に魅かれたのだろう。実際、本書でも、独立章を立てこの点が丁寧に解説されていた（後述③の章）。いずれにせよ、クジラ類の野生動物医学に関し医師（医学）が関わったことはワンヘルス研究の好例と見なされよう。なお、本書筆頭は歯科医師の資格・学位もお持ちの医学・歯学のいわゆるダブル D。あくなき向学心の塊のような人間の根源的好奇心を掻き立てるクジラ類は、魔性の生き物のようだ。他著者 3 名も、それぞれ水産学、地質古生物学および獣医学の碩学で、とりわけ植田獣医師（沖縄美ら島財団）は 2024 年 12 月に開催された第 30 回日本野生動物医学会を事務局長として切り盛りし、この拙文が出た頃は、ぐったりされているはずだ（お疲れ様でした）。

本書本文（各論）は次のような章構成であった。

- ①頭・体幹の骨
- ②進化
- ③発声メカニズムに関する解剖学的特徴
- ④骨標本作製法

これに総論が前置、また、付録 2 点（計測法と画像検査）が後置された。もちろん、各章末には参考文献表もあり、それらを手掛かりにより深く学べる。もちろん、本書は形態学関連書籍なので、豊富な図版や巻頭のクジラ類イラスト集は目玉で、いずれも大きく、分かりやすかった。しかし、その分本書サイズが大型化したので、手軽に持ち歩くには不便ではあったが…。ところで、

そのイラスト集のトップが *Tursiops truncatus* で、その和名が“バンドウイルカ（ハンドウイルカ）”となっていた。併記式なのは同じだが、“バ”で始まる方を括弧にして後置にする日本哺乳類学会（2021）とは真逆であったのは興味深かった。

本拙稿をお読みの方は獣医師や動物看護師が多いと思うので、“骨学”ときくと学生時代の苦行がどうしてもフラッシュバックしてしまい、いくら鯨好きであっても敬遠されそう。脈絡無しの呪文のごとき難解なパーツ名称をただただ記憶する作業は、確かに、辛かった。だが、そのパーツ一つ一つは、生態・進化を反映した賜物であると理解すれば、知的興奮の虜になってしまうであろう。いや、むしろ、陸から海へ適応するという断行を、今の獣医大生の教育のためにやらかしたとも解される程だ。クジラ類の骨を眺めれば、いつの間にか、ウシのあの骨が生理的にこういう意味があり、こういう形になったのかと理解された。何十年も前に学んで、それで終わっていた年寄りですらそのように実感できた。まして、今、解剖学で苦しんでいる若い低学年の学生さんが一読すれば、憂鬱な気持ちが晴れ、この科目が待ち遠しくなるだろう。是非、試してみてほしい。その前に、いくら獣医学教育が僅かな哺乳類を対象にした動物科学であるからといって、ピンポイントにウシだけを引き合いに出すのは如何なものかとお思いだろう。もちろん、本書ではヒトを含む他の動物の骨も比較のために登場するが、やはり、クジラ類が鯨偶蹄目という系統的クラスターに包含されること、ゆえにクジラ類とウシとは外観がまったく異なるものの縁戚関係にあること、よって、ウシとの差異が水中生活による表現型と想像されることなどから、ウシを出した。面白いことに、本書著者らは鯨偶蹄目というタクソンは不承知として、その理由も、なるほどと感じさせた。

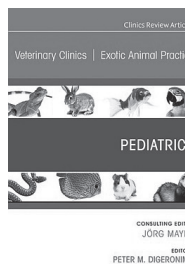
もちろん、本書はクジラ類を展示する水族館の関係者必携なのは当然だが、そうではない獣医師にとってもコンピュータ断層撮影(CT)、超音波検査、内視鏡検査などの読影の参考になると思う。特に、水の中で作業を強いられ、あるいは重くてツルツルした動物を扱うような特殊な場面は、きっと、陸の診療現場でも遭遇してしまうケースであろう。

さて、冒頭の寄生虫と耳との絡みである。あまり詳しく書くのはネタバレなので抑えるが、要するに、好適寄生部位の耳が脳函から離れている / いないが関係するようだ。耳に現局して多数が寄生すれば聴覚に甚大な悪影響を与えよう。ハクジラ類はそのような状態になり易い構造なのである。一方、ヒゲクジラ類の耳は他の広大な部分とつながっているの、寄生虫は分散してしまうという。実は、このことは森満（1991）でも指摘していたよう

なのだが、初めて読んだ時、〈ああ、解剖かあ〉と読んで読み飛ばしたと思われた。今回、本書を読みつつ、森満（1991）を思い出し、再度見たら、ちゃんと書いてあった。もちろん、本書で耳のあたりの構造をフォーマットされた状態で読んだので腑に落ちた。でも、どう見ても、遅すぎです。学生さんたちは、間違っても、このようなダメダメな年寄りにならないように。

引用文献

1. Kim S-M, Youn H-J, Lee K-G. et al. 2023. Novel morphological and molecular data for *Nasitrema* spp. (Digenea: Brachycladiidae) in the East Asian finless porpoise (*Neophocaena asiaeorientalis sunameri*). *Front Mar Sci* 10: doi.org/10.3389/fmars.2023.1187451
2. 森満 保. 1991. イルカの集団自殺. p.177. 金原出版, 東京.
3. 日本哺乳類学会. 2021. 世界哺乳類標準和名リスト <https://www.mammalogy.jp/list/> (2024 年 5 月 16 日閲覧)



『Pediatrics, An Issue of Veterinary Clinics of North America: Exotic Animal Practice, 1E』

Peter M. DiGeronimo,
Joao Lemos Brandao eds

2024 年, Elsevier 発行 240 頁

菅 里美（福山市立動物園）

どの動物種においても、幼体は成体に比べ各種感染症や栄養上の問題に罹患しやすく、各現場においては、突然、小児科的な対応を迫られることも多いと思われる。しかし、特にエキゾチック種にあたる動物については、小児科に特化した文献はなかなか見当たらない。そのため幼体の疾病や人工哺育など各種問題に直面した際には、文献検索含め対応に苦慮することが多い。本書は 1 冊まるごとエキゾチック動物の小児科本であり、哺乳類・鳥類・爬虫類の各動物種について、周産期の親のケアから、人工哺育時に準備すべき餌・ミルク・設備、幼体において考慮すべき疾病と対策等が、その種本来の生活史とともに詳細に記載されている。エキゾチック種や野生動物の幼体のケアに当たる機会が多い現場においては、非常に実用的で頼もしい 1 冊であると思われる。

序文

「人間は動物の乳児に適切に栄養を与える能力があるにも関わらず、野生動物の幼体の代理親としては不適切である」と言われるように、幼体の適切な世話は単に栄養補給を行う以上の意味がある。この上で、本書が各動物に特有な生殖特性や、身体的・認知的発達を説明した構成になっており、それらの幼体を管理するすべての人にとって、貴重な情報源となるであろうことが述べられている。

・フェレット小児科

妊娠期間や産子数、新生子の日増体量や開眼時期などの情報に加え、周産期に見られる問題や、人工哺育時の対応、幼体で問題となりやすい感染症、これまでフェレットで報告されてきた先天性疾患の事例がまとめられている。感染症については、特に犬ジステンパーウイルスについて詳細に記されている。

・ウサギ小児科

ウサギ本来の行動や社会性、妊娠期間、分娩時間、産子数に加え、新生子に推奨される温度管理や、人工哺育となった場合のケア方法が述べられている。また、下顎骨形成不全などの先天性疾患のほか、離乳期に消化器障害が散見されることに触れ、各種腸

炎の原因とそれぞれの発症しやすい週齢等がまとめられている。
その他、環境要因により起こりうる問題やビタミン欠乏などの栄養失調、予防医学についても述べられている。

・齧歯目小児科

ラット、マウス、ハムスター、スナネズミ、モルモット、チンチラ、テグーについて、それぞれの妊娠期間、開眼時期などが一覧化されているほか、各新生子に見られやすい疾患が器官ごとに解説されている。予防医学として、避妊去勢についても述べられ、各種において推奨の有無、実施する場合に推奨される術式についても記載されている。

・ヨツユビハリネズミ小児科

妊娠期間や産子数、妊娠期のメスの体重変化や必要栄養などについて記されている。また、人工哺育を行う場合の温度管理や幼体の成長過程等についても画像付きで説明されている。

・フクロモモンガ小児科

分類や生殖器の特徴、生活史が記載されているほか、幼体の各日齢での成長段階が一覧表で示されている。幼体が罹患しやすい疾病や、獣医学検査をどの段階で実施すべきかなども解説されているほか、人工哺育となった場合のミルクの選択や量・頻度・温度管理についても記されている。

・カンガルー科小児科

新生子における呼吸器・循環器・肝臓・泌尿器・消化器・免疫機能等の成体との違いが解説され、診療を行う上での注意点や検査・聴取すべき項目や、幼体において一般的な疾病や問題とその対応が一覧化されている。

・オウム類の新生子および小児科

各種オウム類について、産卵方式の違いや、人工育雛個体と自然育雛個体における繁殖成功率や新奇性への反応の違いなど、多くの報告事例を交えて詳細に説明されている。晩成型であるオウム類の育雛について、感染症の伝播リスクを最小化するための設備や推奨される手順をはじめ、栄養、日々の身体検査、雛においてよく見られる不正咬合や嚙嚢の過伸展などの疾病や、その対策について写真付きで説明されている。その他診断技術等や麻酔など含め、全項目にわたって詳細に説明されている。

・キジ類の小児科

産卵から孵化、育雛の各段階で用意すべき設備や注意事項、各成長段階の雛に与えるべき餌などが、写真付きで紹介されている。また、各種感染症の他、ペローシスなどの整形外科やビタミン欠乏などの栄養障害についても記載されている。

・カモ類の新生子ケア

カモ類のいくつかの種について、親の育雛戦略や抱卵期間、巣立ち時期が一覧でまとめられ、各成長段階に合わせた施設設備等が紹介されている。雛における臨床上の問題として、各種感染症のほか、エンジェルウィングやペローシスなども紹介されており、副木固定等による各治療法が解説されている。

・ハト類の小児科

ハト本来の交配・抱卵・育雛と雛の成長やビジョンミルクの組成等を紹介し、雛で一般的な栄養障害や各種感染症について記載されている。また出生前後の予防措置についても記載されている。

・猛禽類の小児科

育雛の方法や、孵化中のトラブル、先天異常、各種感染症、代謝性骨疾患や外傷について記載されている。加えて、野生に放す目的で育雛している場合に考慮すべき点についても述べられている。

・爬虫類の小児科の最新情報

一般的に飼育される爬虫類の卵数、妊娠期間、性成熟、成体のサイズ、寿命や重要な感染症一覧が記載されているほか、特にビタミンD欠乏症や紫外線照射に関しては詳細に解説されており、関連研究の一覧がまとめられている。各種問題に罹患した患者の画像も掲載され、参照しやすい。

・野生動物の小児科

北米の野生動物各種について、幼体が保護された場合の対応が記載されており、日本国内種についても応用できると思われる。

・小児エキゾチックペットの行動発達と実用的応用

各種ストレスや環境因子等による影響について様々な事例が紹介され、成長中のエキゾチック動物における健康的な行動を促進することの重要性と、そのために推奨される事等が記載されている。

・エキゾチックコンパニオンアニマルの幼体の栄養考察

小型哺乳類・爬虫類・鳥類について、それぞれの栄養特性などについて述べ、懸念される栄養疾患について解説されている。

本書は文永堂出版のホームページ
<https://buneido-shuppan.com/>
から注文が可能です。

賛助会員（順不同）



株式会社イーグレット・オフィス



文永堂出版株式会社

◆ 編集後記 ◆

先日大きな仕事を終えた後に、チームで打ち上げの名の下、夜の街に繰り出した。皆で苦労話を肴に気持ちよく盃を乾かし、宴もたけなわと思いきや若手のノリに圧倒されてまさかのプリクラ機の中に監禁される。

十数年ぶりに撮影したその、加工技術は眼を見張るものがある。機械と若手から言われるがままにポーズを決めさせられ一枚、二枚と次々に自分とは思えない面持ちと格好の者が画面の向こうに映し出されている。そこに若手を中心に編集技術が更に磨きをかける。慣れた手つきで画面の上でペンを走らせているが、もはや誰一人として私の知る者の顔ではなかった。しかし写真の中では皆、確かにばあポーズやルダポーズなるものを（どれもたどたどしく）決めている。

一体どれくらいの時間が経っただろう。現像されたシールが切り分けられ、「はい！ T中さんも画面見てたでしょ」。手渡されたシールの面々を見ると、私以上年配者は全員視線が外れている。プリクラとはいえ写真なのだからカメラを見つめなければならぬのは基本中の基本。しかしながら、画面の中の自分があまりに実物と乖離していく様を見ないわけにはいかなかったのだ！ 皆の興奮も冷めやらぬまま、会はお開きとなった。

「この爆発力や技術が仕事にも生きればなあ…」とお節介ながらも考えつつもチームの暖かさを実感した時間であったが、対照的な静寂の電車内でひとつ気づいたことがある。どんなに加工・編集技術が発達しても、広くなった額にふさふさの前髪を補填してくれる機能はないのだと。

Y.T

本誌に掲載された内容の一部あるいは全部を無断で複製（コピー）、転載することを禁止します。

会員の方々へのお願い

本誌のお届け先が変更になった際は、下記の事務局にその通知をお願いいたします。ご転居の際は、ご通知をお忘れなきようお願いいたします。

Zoo and Wildlife News

No.59 2024 年 12 月

発行 日本野生動物医学会

〒060-0818 札幌市北区北18条西9丁目
北海道大学大学院獣医学研究院
臨床獣医科学分野 繁殖学教室内
Tel・Fax 011-706-5234
E-mail wildmed@vetmed.hokudai.ac.jp

振替 00890-3-76589

編集委員長 外平友佳理
副編集委員長 井上春奈
編集委員 渡邊有希子
伊藤圭子
田中悠介
後藤拓弥
土井寛大
橋本千尋

制作 文永堂出版株式会社

注 門外不出のため、実際のプリントシールの添付は控えます。
引き続きニューズレターへの皆さまの投稿をお待ちしています。